



COMMUNITY CALLS

BUILDING EFFECTIVE INTER-PROF. TEAMS

「地域からの要請」 機能する多職種チームのつくり方、動かし方

Medical Studio ジェネラリスト・スクール

「コミュニティ・ヘルスケア・リーダーシップ学科」Day 2 教材

地域からの要請

機能する多職種チームのつくり方、動かし方

多くの場合、チームのメンバーは選べない。それは、医療の現場でも、地域の中でも同じである。

では、必要に応じて組成されたチームが、「機能」するためには、どうしたらいいのか。チームはどのような状態になれば「機能」している、と判断できるのか。単に役割を分担し、効率良く目標を達成するだけがチームの意味なのか。このケースでは、職種が異なっても、「望ましいチーム」を構築するためのポイントを学ぶ。

CASE

あなたは人口 150 万人の S 市の A 区(人口 15 万人)にある、病床数 300 床の B 病院で勤務する看護師である。看護師になって最初に勤務した同じ A 区にある C 病院(病床数 500 床、高度救命救急指定病院)では、内科病棟、外科病棟、集中治療室を経験し、卒後 10 年目に結婚・妊娠を機に退職した。子どもが 1 歳になったときに現在の B 病院に入職、まだ子どもが小さいこともあって外来への配属となった。外来では様々な診療科を担当、子どもがちょうど小学校に入学するときに新しく開設された地域医療連携室に配属となった。

外来での経験から、地域の高齢者が認知症や老老介護などで大変な状況となっていることを知っていた。地域医療連携室の開設が予定されていると聞き、もともと保健師資格を持っていたこともあって、地域の中での活動に取り組んでみたいという気持ちで自ら志願したのだった。連携室開設前から「地域包括ケア」に関する研修会に通うようになり、「コミュニティ・デザイン」をテーマとしたセミナーなどにも足繁く通って、関係する図書も色々と読み、自分なりの「地域医療連携」のイメージもできていた。参考図書を読む中でとくにあなたが関心を持ったのは「暮らしの保健室」の活動であった。子どもの参観日などで小学校に行くようになり、子どもからの話でも学校の中で「保健室」が体調不良の際の対応のみならず心理社会的なケアなど様々な役割を担っていることを知った。あなたは、病院の地域医療連携室が地域の中で「保健室」のような役割を果たすことができれば、と考えるようになっていた。たまたま子どもと同じクラスの子の母親が A 区内の薬局に勤務している薬剤師で、彼女からも「薬局もこれからは大きな病院ではなく地域に目を向けていかないとやっていけない」という話を聞き、病院だけではなく地域の薬局とも連携して大きな意味での「まちの保健室」を作らなければいけないと思うようになっていた。

地域医療連携室に配属されたのは、あなたの他に 30 代前半の同じく女性の社会福祉士 1 名、40 代後半の男性事務職 1 名の 3 名であった。

地域医療連携室が開設してからは時間も自由に使えるようになったため、まずは「地域に出る」ことから始めようと思い、社会福祉士とともに「地域診断」のため地域を歩いて見て回ることにした。

電車の駅から続くアーケード街は、ほぼ半数のシャッターが降りている。1980年代までは賑わいを見せていたが、郊外型のショッピングセンターが駅から離れたところできてからは、むしろそちらの周辺が新興住宅街となっていた。昼間にアーケード街を歩いているのは、駅周辺に昔から住む高齢者がほとんどだ。駅前商店街の組合長に会って話を聞いたところ、店に来る高齢者の関心事はやはり健康のことが多く、営業よりもむしろ「よろず相談」が主になっているような店もあるようだ。駅の反対側にはあなたが以前勤めていたC病院があるが、外来はすべて紹介制となり、救急車がひっきりなしに来ているような状況で、気軽に受診できる場所ではないことはすでに知っていた。

あなたは次に、A区内に最近できた「認知症の家族の会」代表のDさんに会いに行った。Dさんは現在58歳、A区の出身だが、東京の大学を卒業してからそのまま東京の会社に勤務、86歳の母が認知症になったのを機に、早期退職してA区の実家に戻り、妻と共に自宅で母の介護をしている。もともと活動的な性格で、自らの体験から認知症の家族が大変な状況に置かれていることを知り、横のつながりをつくる必要があると感じて「認知症の家族の会」を立ち上げたのだった。Dさんの実家はもともと飲食店を営んでおり、父が亡くなった15年前に店は閉めたのだが、そのスペースを使って週に1回、「家族の会」を開催している。市の広報に載ったこともあり、毎回5～10名の参加者があり、お互いの状況を聞き合ったり、医療や介護に関する情報交換がなされたりしている。Dさんはあなたに言った。

「家族同士で話すことで安心できることも多くあります。ただ、やはり医療のことは素人で、医療関係者とのつながりができるともっと良いのに、と思います。」

地元の地域包括支援センターが主催する地域ケア会議^{*1}でも、似たような声を聞いた。ある民生・児童委員^{*2}は、引きこもりがちな独居高齢

^{*1} 地域ケア会議：地域包括支援センター等が主催する多職種による定例会議体。医療・介護の専門職や行政職員、自治会役員のほか、警察・消防など関係者が参加できる。個別ケースの検討のほか、地域課題の特定や地域資源の開発等を担う。

者が、自分の健康について相談できる場が必要だ、という声をあげていた。自治会の婦人部⁷³では、週に1回、高齢者会館を利用してシニア・カフェをやっており、それなりに盛況であることが発表されていた。

あなたは決意した。ニーズはある。アーケード街の空き店舗を利用して「まちの保健室」をつくろう。家族会とも連携して、A区内すべての人が気軽に健康相談ができるような場所にしよう。

あなたは早速企画書をつくり、院長に提案した。病院としても地域とのつながりをつくりたいと思っていたこと、あなたの企画書にあった「コミュニティ・デザイン」という用語に院長が強く共感したこともあって、企画はすぐに採用された。アーケード街の空き店舗を格安で借り、リラックスできるような相談スペースをつくり、表には「まちの保健室 いつでも気軽にお立ち寄りください」という看板を掲げた。

あなたの目論見通り、相談に来る高齢者は後を絶たなかった。認知症の家族の悩みを抱えている相談者は、家族の会につないだ。何気に立ち寄った高齢者が、早期の認知症を伺われる状態で、B病院外来につないで適切なフォローができたケースもあった。それ以外にもまちの保健室からB病院外来受診につながったケースが多くあり、院長も評価してくれた。アーケード街にも活気が出てきた。まちの保健室の隣の空き店舗を使い、健康食品を売る店ができた。向かいには、新たに薬局がオープンした。あなたの活動をPTAの時などに聞いていた例の薬剤師が薬局に提案し、実現したのだった。彼女はそこの薬局長になった。商店街全体としても以前より収入が増え、組合長もあなたにとっても感謝していた。

いったん休職している看護師・保健師仲間や、病院の訪問看護ステーションにも応援を頼んでなんとかまわすことができている。この場の必要性に共感してくれる運営ボランティアも少しずつ増える傾向にあった。

あなたは自信を強めた。やはり、まちにも保健室が必要なんだ。

⁷² 民生・児童委員：高齢者や子ども、障害者の相談に乗るもともと住民に近い準公務員。要支援者の特定や個別訪問、個別相談、見守り活動などをほぼ無償で行う。

⁷³ 自治会婦人部：町会・自治会によくある組織の一つ。女性が中心になり、冠婚葬祭の裏方や相互の親睦を深める行事を行う。

活動も順調に見えていたが、2年が過ぎた頃から雲行きが怪しくなってきた。異変の最初は、家族の会だった。Dさんから「もう紹介しないでほしい」と言われたのだった。理由は、保健室からの紹介が増えすぎて対応できないこと、人数が増えたことで以前のようにリラックスした雰囲気交流することができなくなったこと、健康食品のセールスをすることが目的で参加してくるような人も出てきたこと、などであった。B病院の方も、問題が現れた。近隣の開業医からの紹介が徐々に減ってきているということが明らかになったのである。向かいの薬局も、思ったような収益につながらず、PTAで薬局長に会ったときも話づらい感じになっていた。病院は、もともと約束していた資金提供の期限が近づいていることもあり、このままでは、資金援助を継続することはできない、とくぎを刺された。連携室の社会福祉士からも、「地域の”真のニーズ”に応えていないのではないか」と懸念する発言が聞かれるようになった。

ただ、保健室に来る高齢者は減るところかむしろ増え続け、保健室前のスペースにベンチが置かれるなどしてはや「サロン」と化していた。隣の健康食品店の売れ行きは物凄く、他の空き店舗にも高齢者向けの店が次々とオープンし、アーケード街はかつての賑わいを取り戻したかのように見えた。

あなたは思った。何かがおかしい。これは「保健室」なんかじゃない。どこで間違えた？

DISCUSSION

1. 「まちの保健室」に関わるチームの構成と、それぞれの関係性を簡潔に図で示してください。
2. 「あなた」が意図しなかった保健室になった原因を構造的に分析してください。
3. この状況を改善するためのアイデアを書き出してください。